

ヲ書テ、相模入道ノ方へ被遣、

〔太平記 十六〕新田左中將被責赤松事

義貞是ヲ聞給テ、此事ナラバ子細アラジト被仰テ、頓テ京都へ飛脚ヲ立、守護職補任ノ繪旨ヲゾ申成レケル、其使節往反ノ間、已ニ十餘日ヲ過ケル間ニ、圓心城ヲ拵スマシテ、當國ノ守護國司ヲバ將軍ヨリ給テ候間、手ノ裏ヲ返ス。様ナル繪旨ヲバ、何かハ仕候ベキト、嘲哂シテコン返サレケレ、

〔沙石集 三上〕忠言有感事

サテ領家ノ代官モ、日來ハ事ノ子細キ、ホドキ給ハザリケリ、コトサラノ僻事ハナカリケルニ、コントテ、マケヤウヲ感ジテ、六年ノ未進ノ物ノ、三年ハユルシテケリ、ワリナキナサケナリ、是コソマケタレ。バ、コソガチタレノ風情ニテ侍レ、

〔北條五代記 二〕岡山彌五郎木下源藏討死の事

その上軍は勝て負る事あり、負て勝事あり、木下源藏敵の首を取といへ共、却てをのが首を敵にとられぬ、是進退をわきまへず、不義の働ゆへ、勝て負るとは是也、略中 扱又千葉勘兵衛此中日々のせりあひに、彌五郎源藏があとに有て、見えがくれ成しが、今日に至て、雙方の軍旗を見定、兵氣をはかつて、諸人に抽て、敵を討取、是をこそ懸引の上手の武士、負て勝とはいふべけれ、

〔北條五代記 八〕北條家の軍に貝太鼓を用る事

物見の武者歸り來ていはく、義弘か。つて。甲。冑。を。ぬ。ぐ。と云々、氏康此よしを聞、油。斷。強。敵。とすと云、古老のいさめを肝心と取さだめ、霞たつを幸とし、貝太鼓をもならさず、敵陣間近くをしよせ、関音をあげ、無二に責かゝり、勝利をえられたり、

〔甲陽軍鑑 九上 品第二十三〕信州平澤大門到下等合戦之事